



もっと「知りたい」「知らせたい」… みんなで

ひるがのーと..

Vol.10



(目覚め/撮影:中谷 安樹)

第3回 大地の上のお祭り ひるがのクラフト展

La Fete Sur la Terre
ラフェット スー ラ テール

開催日: 2013/5/4-5
会場: コキアパーク
(ひるがの高原スキー場)

こだわりの
手作り雑貨が
ひるがのに
大集合!

今年で第3回を迎えるひるがのクラフト展は、モノづくりを通じて大地と人・人と人・里山と街を繋ぎ、そこから生まれる元気を発信できたらと言う思いで生まれたイベントです。会場をひるがの高原コキアパークに移し、郡上を中心とした岐阜エリアからはもちろん、県外からの出展者も多数。各種作品の展示販売のほか、手作り体験ができるワークショップなど、ひるがのという大地の上で、様々な手仕事や人が出会う、交流し、大自然の中で生まれる元気をみんなで繋げてみませんか!



お問い合わせ
高鷲観光協会・ひるがのクラフト展係
Tel.0575-72-5000

「ひるがのーとの会」について

現在、ひるがのーとは「ひるがのーとの会」が発行者となり、皆様の寄付や賛助会費で運営されています。お陰様で、本年もたくさんの方から寄付や賛助を頂戴いたしました。心より御礼申し上げます。なお、現在運営費の半分近くを郡上市からの補助金にて賄わせていただいておりますが、1年後からは補助金なしでの運営となります。引き続きみなさまの篤いご支援をお願い申し上げます。

ひるがのーと 協力金

ありがとうございました

古橋さん 田中多恵さん
松本圭司さん 西島一寿さん
井上 充さん 井上かおるさん
細江 章さん 西村美奈子さん
藤井・大川さん 高井省三さん

■ ひるがのーとの会 ■

代表 / 清水 聡 0575-73-2101
和田繕長 山畑光知哲 和田孝夫
水口博 福手均 中屋善雄
中田香代子 井林美和子 若美屋耕治

■ 制 作 ■

ばっば・るいーず (中屋園実 森祐子)

■ 協力 写真・文 ■

中谷安樹 瀬川和也 舟橋哲也 中田信也

ひるがのーとへのご意見・ご感想もお待ちしております。どうぞお気軽にご連絡下さい。

ひるがの簡易郵便局の観光案内所
(湿原植物園窓口) 中田まで

ひるがのーとの会

●協力金一口 / 500円より

ご協力いただける方はお手数ですが、
○フレッシュフーズひるがの 田中多恵さん
○観光協会・湿原植物園窓口 中田さん
どちらかへお願いいたします。

〇〇〇 消防団より 〇〇〇

今年は郡上市内で薪ストーブによる火事やボヤが多発しました。多くは「煙突内にたまったスス」が原因です。危険ですから1年に一度以上は必ずメンテナンスをしてください。

また、今は一般家庭でも火災報知機の設置が義務付けられています。まだ取り付けが済んでいない方はお早めにお願ひします。

なお、お年寄りなど思うように取り付けができないかたは、消防団でお手伝いしますので、気軽に声をかけてください。

ひるがの消防団長 水口 学

編集後記

●「ひるがのーと」を楽しみにしてくださっているみなさん、いつもありがとうございます。今回もなんとか仕上げることができました。この10号は、当初の計画では昨年末には出来上がっている予定でした。それが、何をどうしたことが、季節はすっかり春めいています。なかなか自分に厳しくなれない私のお尻を叩いてくださる方はいないものかと、いつも話しています。マネージャーのようにスケジュール管理してくださる方、ほんとにいらっしやったら、ぜひ、ご連絡ください。

●さて今回の「ひるがのーと」は、開拓前のひるがのを振り

返って貴重なお話を聞かせていただきました。この企画で感じたのは、確かにそこにあった事実でも、誰も語らず、誰も聞かず、そして何かの形で残さなければ、それはなかったことになってしまうこともある、ということです。ひるがのの歴史はまだ浅く、自分の体験としてお持ちの方もたくさんご健在です。だからこそ、いろんな方にお話を聞いて、それを残していくお手伝いのでしたら、「ひるがのーと」にも新しい意味ができるかな、と。こんなことあったよ、とか、あんなことがあったらいいよ、とか。様々な話題を広く求めています。こちらも、ぜひ、ご連絡下さい。

ひるがのーと..

ひるがのーとは、郡上協働まちづくり活動支援補助金の交付を受けて作成しています。

編集・作成
ひるがのーとの会

発行日/2013.3.30



突然の創刊以来、ぽつりぽつりと発行されてきた「ひるがの一と」。
ひるがののすばらしいところをみんなで共有したいという思いで、第一号がスタートしてから二年半が過ぎ、これでなんと10冊目となりました。

そこで今回は「ひるがの高原の生い立ち」を見つめてみよう、という節目らしいことを企画。知ってるようで知らない。そんなひるがのをあえてご紹介するべく、代々ひるがのの土地を受け継いでいらっしゃる洞平由夫さんに、貴重なお話を聞かせていただきました。



ひるがの高原スキー場オープン当初の中腹からの写真。



現在のひるがの高原スキー場(コキアパーク) 中腹からの風景 左モノクロ写真に比べ民家が増えている

ひるがの高原の ルーツを探ってみました。

資料も少ない「開拓前のひるがの」



現在は観光で広く知られる「ひるがの高原」ですが、もともと湿地で、寒さの厳しいことから、人の住む場所ではないと言われていました。そこに、戦中戦後の国策として、開拓団が入り、そこからひるがのの歴史は始まった。…そう思っている人は少なくありません。地元の小学生も、学校のふるさと研究の授業でいろいろ調べたりしていますが、ほとんどが「開拓以後」のひるがののです。というのも、それ以前の資料はほとんど残されていないからだそうです。

でも、ひるがのには、国策としての開拓が入るずっと前から、代々土地を持ち、田畑や山林として大切に守り続けていた人たちがいました。その中のお一人が今回お話をうかがった洞平さん。ご両親やご祖母から聞いてきたことや、ご自身の記憶から、たくさんのお話を聞きました。



〔B〕(昭和13～14年頃)
大日道場での写真(現在の麓林坂周辺)
写真:右から2番目が洞平さん(4才頃)
3番目が洞平さんの祖父(ヨザエモンさん)

人が住み着くより前から家があった!?



洞平さんが生後幼少期を過ごしたのは、現在のひるがのからほんの少し下りた「釜ヶ洞(かまがほら)」という地区(P.4 写真〔A〕)。現在の国道156号線を白鳥に向かって走ると、ひるがのを下り始めてすぐの左側。現在では林になっていて、7軒あったという集落の跡は見取れません。

当時、釜ヶ洞を含む7号組※の人々の多くは、そこからひるがのの耕地に通い、米やヒエ、大豆などの農作物を作っていたのだそうです。当然、整備された道路があるわけではなく、山道を歩いたり、馬や牛を使って荷物を運んだりしました。それでも、それぞれの耕地には出作り小屋を持ち、夏の間はそこを仮の住まいとして、馬牛の厩と同居の寝泊りをしていたとか。

「小屋と言ってもけっこう立派なモンやったよ。柱も屋根もきちんとした造りで、中には囲炉裏があって、火の粉が天井に登らないようにする天棚(あまだな)もあって、6～8帖ほどの広さがあった。今、アレを再現しようと思うと、その技術を持つ人も少ないだろうし、相当な費用が掛かると思うよ。」と洞平さん。

小屋というには立派なその建物は、現在のみたがいの辺りには何軒か点在していたといいます。しかも、いつ建てられたともわからないほど、昔からそこにあったと。ひるがのには人が住み着く以前から人家があったということですね。

日本海から魚が遡上してきた!?



洞平さんが子供の頃のお話でもうひとつ。
昔は川も細くてぐねぐねと蛇行していて、魚がいっぱいたのたそうです。

「岩魚がたんとおった。5歳くらいの頃、おじいさんに木の枝で簡単な釣り竿を作ってもらって釣りをした。それでもおっきな魚が掛かって、川に引っ張り込まれたこともあった。川がうねつとつて、魚が隠れるとこがいっぱいあったなあ。」
日本海からは、サケが産卵のために庄川をひるがのまで遡上していたというお話も。

「平瀬にダムができる前まではマスがここまで上ってきたよ。山小屋の裏には素掘りで作った池があって、上ってきたマスを捕まえて飼った跡がある。」
これほど豊かな自然であふれていたということも、もう知る人の少ない貴重なエピソードのひとつです。

厳しい生活環境が続いたことも。

ただ、暮らしていくにはやはり寒冷地は厳しい環境でした。現金収入のないこの時代に不作が7年も続いたこともあったそうで、その頃、苦労をされた先人の様子が、お寺の過去帳にも残っているそうです。

人は木のあるところに寄る...

「ひるがののスキー場のてっぺんから見下ろすと、ひるがのの町がちょっと日本じゃない、いいとこみたに見える。緑がなんともしっとりといひ雰囲気を作っとる。」

洞平さんはそう言います。ほんとにその通りで、スキー場の上から見る眺めが好き、という人はたくさんいると思います。

開拓当時のひるがのは、農地にするためほとんどの木を切つて、何にもない荒地でした。そこに人が暮らし始め、厳しい自然と共存しながら生きてきた。

それから50～60年。再び木が育ってきました。ここを訪れた人は言います。

「とてもいいところですね。」

そして洞平さんは言います。

「それは木が育ったからだ。」

人は木のあるところに寄るからね。」

多くのことを乗り越えてきたひるがのは、今、とても穏やかな顔で住民や観光客を迎えてくれます。



PROFILE

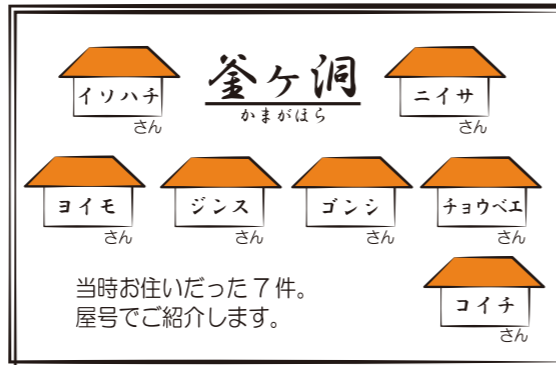
ほらひら よしお
洞平 由夫さん(77)
昭和10年8月、釜ヶ洞地区に生まれる。ひるがの高原キャンプ場を経営するかわら、昭和62年～17年間を高鷲村村会議員として村政に尽力された。

観光地ひるがので ——。

開拓については、たくさんの資料もあり、皆さんでご存知の事も多いので、今回は詳しく書きません。開拓によって、農地や宅地の開墾が進み、たいへんな苦労の末、現在のひるがのの基盤ができたことは事実ですが、その一方で、国策のために洞平さんたち地元の人々が、持っていた土地の多くを手放さなくてはならなかったこともまた確かな事実でした。そうして土地を買い、入植した人の多くは、ひるがのを故郷としてここに根付きました。けれど、開拓農家の中にはスキー場オープンなどで地価が高騰した時、土地を売ってよそへ行ってしまった人も少なくなかったとか。一方、洞平さんをはじめ、地元の人々はスキー場のオープンをきっかけにひるがのに住居を構え、宿泊などの観光業に従事するようになりました。

現在のスキー場はひるがの3番目にできた!?

現在のひるがの高原スキー場がオープンしたのは、昭和39年。でも実はこれより前にも小さなスキー場があったのだそうです。最初は現在の高鷲ファーマーズの裏手にあたる場所(焼山)。リフトなどはあるはずもなく、丘をスキーで踏み固めた簡易スキー場。それでもずいぶん人が集まったのだとか。2番目は現在のスキー場より少し荘川寄りの場所にできたそうです。1,2番目ともに有志の方たちで始めたということで、間もなく閉鎖しますが、ここに人が集まったことが、観光化のひとつのきっかけになったといえるのでしょうか。



7号組 ※

洞平さんが昔住んでいた釜洞地域は、当時、もう少し西洞寄りのドドメキ、さらに西洞寄りの折立と、3つの地域を合わせて7号組という一つの組だったそうです。現在、ひるがのの観光業では、元7号組だったお宅が多く活躍されています。

写真：釜ヶ洞地区 (広域 A)

ひるがの略年表と小学校の推移

- 昭和 15 年 (1940) ひるがの開拓始まる (大日道場)
- 昭和 21 年 (1946) 開拓団入植開始
- 昭和 22 年 (1947) 高鷲小学校大日分校開設
12月 大日小学校となる
- 昭和 31 年 (1956) 大日小学校を新築
- 昭和 33 年 (1958) ひるがのに白山神社建立
ひるがの点灯 (電気導入)
- 昭和 38 年 (1963) 三八豪雪 (ひるがの 3.6m)
- 昭和 39 年 (1964) ひるがの高原スキー場オープン
※オリンピック東京大会開催
- 昭和 56 年 (1981) 五六豪雪 (ひるがの積雪 4.1m)
- 平成 7 年 (1993) 大日小学校 閉校
高鷲北小学校 開校



大日道場に隣接して設けられた、仮の大日分校校舎 (第一号)



スキー場 (みんなイキイキしてる)



スケート場もあったけど... (積雪が多くて閉鎖された)



大日小学校 (初期)



隣接してあった中学校校舎



昭和 31 年以降の大日小学校校舎



現在の高鷲北小学校校舎



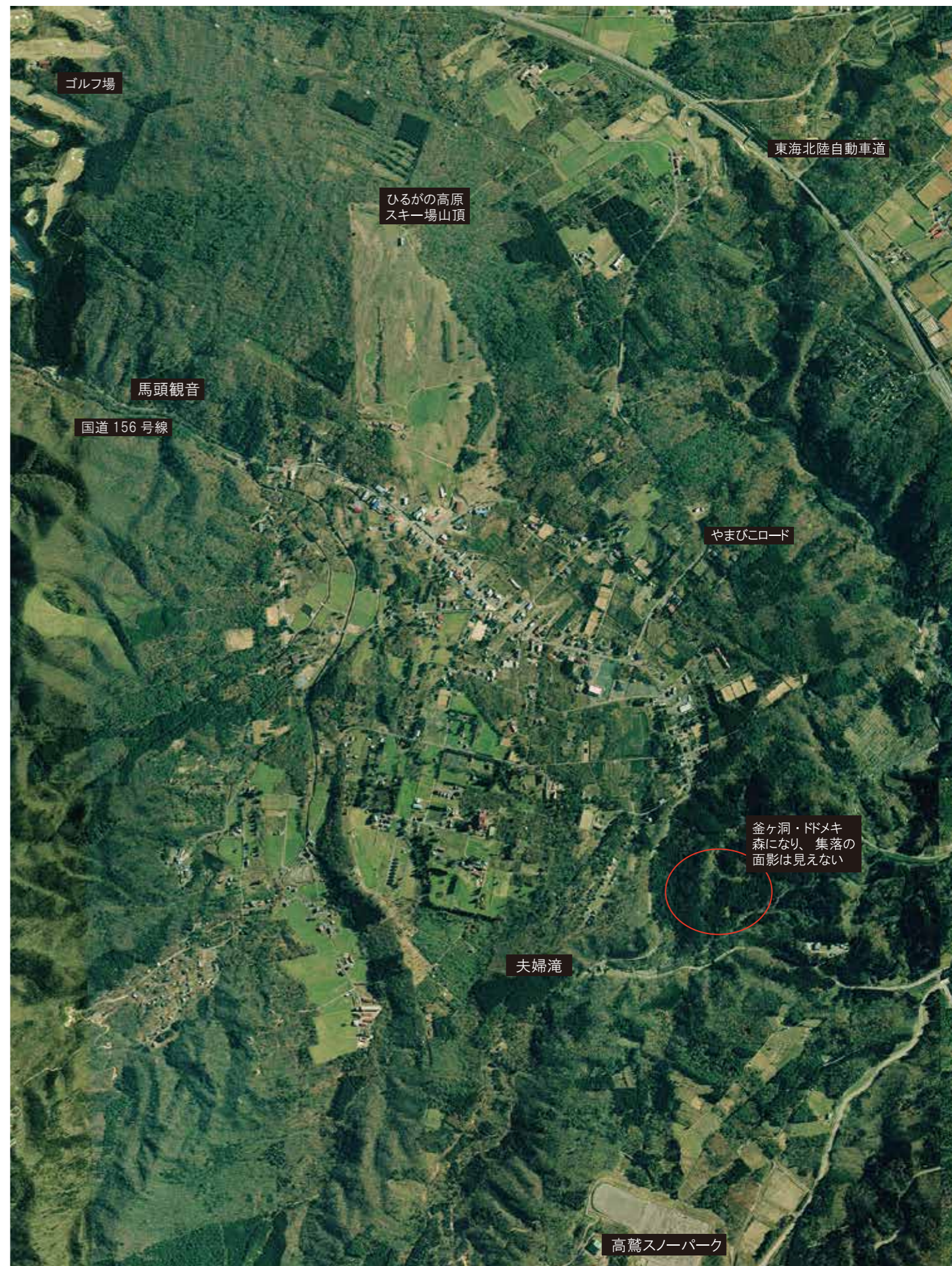
■右下の釜ヶ洞・ドドメキ地区に民家があるのがわかる

昭和 30 年 (1955)



- ①温泉は鉄分が多く、タオルも茶色く染まったそうです。
- ②焼山のスキー場は当時の小中学生がたくさん滑りにいったそうです。
- 別荘ブーム。別荘用地の道路が多く整備されたのがよくわかる。

昭和 43 年 (1968)



■開発途中だったこれまでの写真に比べ、木々が育ってきた。

平成 17 年頃 (2005 頃)

知ればもっと好きになる。

失われていく草原とひるがの高原の植物

湿原も草原の一部です。

ひるがの高原の植物の特徴は、一言で言えば「草原の植物」であることです。ひるがの高原といえば、まずはミズバショウに代表されるように「湿原植物」が思い浮かびますが、湿原というも実は草原の一種なのです。草原には大きく分けると3種類あって、そのひとつが、人の手が入らない自然のままの「自然草原」。湿原や高山がここに入ります。これに対し、人の手によって造られた草原を「人工草地」と呼びます。人が種をまいて育てている牧草地や、芝生を植えているゴルフ場などがそうです。そしてもうひとつが「半自然草原」。これは自然に生えている草を刈るなどして、人間が手入れしている場所を指し、スキー場のゲレンデやあるいは川の土手、人家近くの空き地などがこれにあたります。要するに草むらのことですね。約100年前、明治時代の日本にはこの「半自然草原」がたくさんありました。

減少してしまった草原とレッドリストの植物たち

昔、草原は主に田の肥料となる草を採る場所として利用されていました。田の肥料を草原の草でまかなうには、田の2～5倍の面積の草原が必要でした。そのため明治時代には国土の約10%以上の土地が草を採るための草原でした。さらに、馬や牛のえさや屋根を葺くための萱を採るなど、人々の生活の様々なところで草原は利用されていました。そこに生きていた植物は人間が手を入れることによって、生命を維持してきたのです。

ところが、日本人の生活が変わり草原は利用価値を失いました。結果、現在までの約100年で、草原は当時の10分の1ほどに減ってしまったのです。そして当然、草原の減少によって、そこに生きてきた植物も減りました。環境省からは数年に一度、レッドリスト（日本の絶滅危惧種）が公表されていますが、ここに載っている植物種のほとんどが草原の植物なのです。昔はどこにでも生えていたはずの、しかし今となっては貴重な植物が、ひるがの高原には幾種類も生きています。

ひるがのの高原の植物の不思議な共生。

最初にも言いましたが、湿原も草原の一種です。以前のひるがの一とで、ひるがの高原にはワタスゲやキンコウカなどの高山植物が残っているという話を書きましたが、高山というのは日本国内で「自然草原」ができる数少ない場所です。これらの植物があるということは、ひるがの湿原はほとんど人の手が入っていない「自然草原」だと言えます。ところが、この10年あまりの調査で「半自然草原」の植物の多くがここにあり、そのうちかなりの種類の植物が湿原の中に生えていることが分かってきました。これこそが「湿原と人間の生活圏が混ざり合っている」というひるがの高原の特徴をあらわしているのではないかと思います。

ひるがのの貴重な植物の保護方法。——そして未来。

ひるがの高原には、大ざっぱに分けると「自然草原」の植物と「半自然草原」の植物の二種類があるということになります。実は僕がひるがのに来た当初は、ひるがの高原の植物の種類ごとの違いについての知識も考えも浅く、貴重な植物全部について、生育環境にできる限り手を入れるべきではない、つまり自然のままがいいという考え方でした。けれど、その後なんとなく、手を入れた方がいい場合もあるような気がして、そんなやり方もしてきました。そしてここ数年、参考図書を読むうちに、湿原を草原の一種と考えると、2種類のタイプに分かれることに気づきました。そして、ひるがの高原の貴重な植物を保護していくためには、できるだけ自然に近い環境を整えるべき場合と、適度に手を入れてやるべき場合とに分けて対策していく必要があると分かったのです。これによって、ひるがの高原の植物の未来に新しい希望が見出せたら、と思います。

草原の分類

自然草原

高山植物群落
湿原植物群落
石灰岩地の植物群落
など

半自然草原

採草地、放牧地
伐採跡地、ゲレンデ
道路沿い、畦
土手など

人口草地

ゴルフ場
牧草地など



「樹上の忍者」

ばーどーうおっち

File No.6

ゴジュウカラ

スズメ目

ゴジュウカラ科

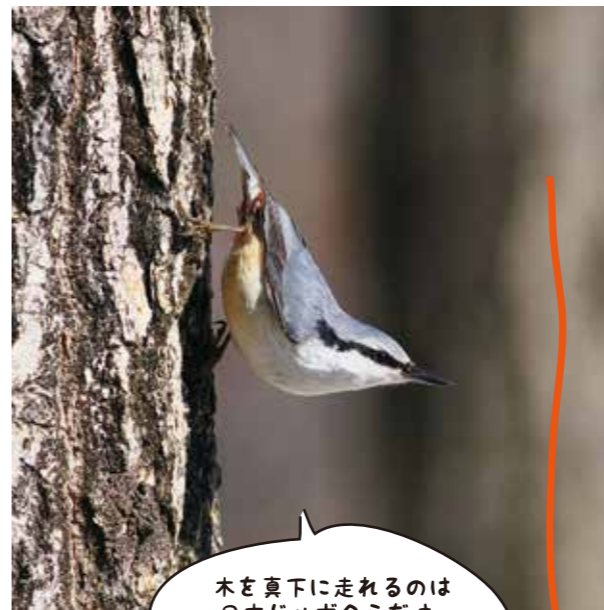
全長約13.5cm



黒のラインがカッコイイ。
忍者メイクっばいよね。

尾は短く、頭から背中にかけて青味がかった灰色、腹部は純白、くちばしの付け根から首にかけて、過眼線(かがんせん)と呼ばれる黒い帯があります。この鳥の特徴はなんと言ってもその独特の動きです。木の幹を、頭を下にして降りたり、幹の周りを軽々と移動することができます。頭を下にして降りることができるのは、日本に生息する野鳥の中でゴジュウカラだけです。「森林の軽業師」とも呼ばれています。

このゴジュウカラは大変に気が強い鳥で、人が近くにいても全然平気、ヒマワリの種が好物で、幹のすき間に挟んで凄く勢いでカンカンカンとつついて割って食べます。



木を真下に走れるのは
日本じゃボくらだけ。
リスと間違えられるくらい
すばしっこく走れるよ。

ひるがの高原では四季を通じて観察することができ、落葉広葉樹林に生息しシジュウカラなどの他のカラ類やコゲラと混群を形成することが多いです。厳冬の積雪時は餌不足になるので、軒先に餌台を設置(止り木も忘れずに)してひまわりの種を置いてやると必ずつつきにくるので試してみてください。

みて!みて!
この大きな
ひまわりの種♡
いいでしょ〜。

どや〜

【文/写真:舟橋哲也】

ひるがの高原にある半自然草原の植物たち

ウメバチソウ

オミナエシ

サギソウ

サワギキョウ

トキソウ

ノハナショウブ

マツムシソウ

ミカツキグサ

ヤマラッキョウ

【文:瀬川和也・中屋園実/写真:瀬川和也】

★ **がんばれ!** ★
ひるがの
KIDS&Jr

ひるがのピアレージングジュニア

表彰台目指して
.01 秒差の熱い戦い



▲チームメイト

寒い冬の朝。まだ外は薄暗い早朝から起き出して、出掛ける準備をする子どもたちがいます。

「ひるがのピアレージングジュニア」の小さなレーサーたちです。

道具は、スキーもブーツも子どもには(大人にも?)重くてたいへんですが、大きなブーツバックを背負い、板を担いでグレンデを目指します。

時には急斜面が怖かったり、かりかりのアイスバーンで転倒したり。

.01 秒の差でも勝ったり負けたり、の厳しい世界では、悔しい涙もいっぱい流れます。

それでも凛々しい顔でスタート台に立ち、ピッピッピンという合図にはじかれるように勢いよくポールバーンに飛び出していく。その背中にはたくましく、眩しく見えます。

「ひるがのピアレージングジュニア」は、今から12年ほど前、ひるがのプロスキースクールの協力で活動を始めました。今年、何度も新聞に登場し、国体やインカレなどで活躍している佐藤絵里さん・三代さん姉妹は、このチームの先輩で、大学生になった今も現役でがんばっています。また、高鷲中学校の小川達也くんは、今年、全国中学生大会のSL部門で25位という成績を残しています。

先輩たちの後を追えと、ちびっこレーサーたちも練習に励みます。今シーズンはナイター練習も積極的に行いました。

現在、チームには小中学生17名が所属しています。高鷲には6つのスキー場があり、チームの練習にも協力的で、とてもめぐまれた環境です。けれど、大会に出て行く岐阜県内でも飛騨地方にはレベルの高いチームがたくさんあります。

その中でも負けずに、この先、ひるがのからもどんどん速い選手が出てくるといいですね。

がんばれ! ひるがの子どもたち。



小川達也くん (14)
2013 年全国大会出場。
3月上旬に開催された選考会で、2013 ジュニアオリンピック出場決定しました!



▶ ひるがの高原スキー場での練習風景

❄️ **スノーウォーク** ❄️

報告します。 第2回のひるがの高原スノーウォークが2月3日に行われました。

なんと今回は総勢100名を超えるご参加をいただきました。いよいよブーム到来??

行程は湿原植物園や分水嶺公園、源流の森を歩くコースと、リフトに乗ってひるがの高原スキー場の山頂から歩いて降りてくるコースの2つ。いずれも2mくらい積もった雪の上、しかも普段入ることのできない林の中やヤブのところを歩くので、地元のひるがの人でも見慣れない風景で新鮮だったとか。来年はみなさんも、ぜひご参加下さい。

なお、いわゆる『西洋かんじき』スノーシューを履いて歩きます。和式のかんじきよりも幅が狭く軽いので、慣れてなくても歩きやすいのが特徴です。スキー場や ODSS でも借りられます。

また、スノーシューやウォーキングについてはひるがのの清水肇さん(岐阜県ノルディックウォーク連盟会長)が詳しく教えて下さいます。

どうぞお気軽にお声掛け下さい。



ひるがのが大好きすぎて
黙っていただけませんでした(笑)



二年半前、なんの前触れもなくいきなり発行されたフリーペーパー「ひるがの一と」。得体のしれないこの媒体を、ひるがのみなさんはわりとすんなり受け入れてくださり、その上ありがたいことにとってもかわいがってくださっています。

この場をお借りして、厚く厚く御礼申し上げます。

みなさんのおかげで今回10号目を発行することができました。

そこで、いつもひるがの LOVE な方にご登場いただいているこのコーナーに、自分たちが登場してしまうことにしました。

テーマは「もしも、ひるがの一とがひるがの一とを取材したら?」



左から順番に
既刊 Vol.1 ~ Vol.9

「ひるがの一と」って
どんな意味?

「ひるがの一と」はみんなで書き込む伝言板や寄せ書きノートみたいに、たくさんの方が情報を共有する場所にしたいなと思ってました。私たちがいつも思っているのは、「ひるがの」ってとてもいいところ、しかも住んでる人はみんなそれを知ってる「ってこと。それぞれが持っている情報をみんなで教え合う場があれば、みんなでひるがのの魅力を確認できるんじゃないかと。「ひるがの一と」を作っていると、人、自然、仕事、歴史など、やればやるほど知ってほしいことがどんどん出てきて、さらにひるがのの良さを知る自分があります。

そうして作った「ひるがの一と」を皆さんが見て共感してくれたいですね。よそから来た人を見て「いいなあ」と思ってくれたらもう嬉しい。「ひるがのが好き」というパワーがどんどん大きくなって、外にも広がっていったら、今よりさらにいいところになるんじゃないかと。地味ですが、意外と大きな野望がメラメラと燃えていたりする、実はそれが私たちが「ひるがの一と」を制作する意味なんです。

「ひるがの一と」を
作る時、大切に
していることは?

1つは「ひるがの」の人が見てもおもしろいと思うこと。一般的な観光パンフレットと違って、ターゲットはあくまで地元の人たち。何よりひるがのの人が興味を持ってくれそうな事を毎回取り上げています。

もう1つは「必ず自分たちの目線でお伝えすること」。ずっと前からよく知られている事でも、必ず自分たちで体験したり、取材したりして「ひるがの一と」の目線で発信しています。記事も写真もできる限り既存のものを使わず、その都度、制作・撮影したものを使うようにしています。新しい話題ならOKってわけでもなくて、「今、載せたら逆に新鮮」「知ってるようで知らない」というツボをいつも狙っています(笑)

「ひるがの一と」って
誰が作ってるの?

企画・編集・制作をひるがの在住の中屋と森が手掛けています。ふたりとも広告の制作や編集の仕事の経験があったことがきっかけ。ふだんはかなりのんびりタイプですが、ひるがの一との立ち上げには、今考えるとびっくりな行動力を発揮しました。他にも表紙のステキな写真は中谷安樹さんに、植物のページは瀬川さんに、また野鳥のページは別荘の舟橋さんに、自然や動物の話では中田さんに、とご協力いただいている方がいらっやいます。あとは、快く取材に応じてくださるひるがののお店や企業、個人のみなさん。たくさんの方のご協力で成り立っています。